



水俣病犠牲者慰霊祭

ノーマア・水俣病

水俣で初の慰霊祭 38柱の霊を慰む

世界の奇病といわれる「水俣病」で死んだ三十八人の犠牲者の霊を慰める初の慰霊祭は、十八日、会員百十一人の主催、水俣、出

水西市、葦北郡四町の後援で仏式により盛大に行なわれた。

知事代理並野県衛生部長、田中県議会副議長、期大医学部、関係市長および地元各代表などの来賓、遺族、互助会員など約三百人が参列、正面の祭壇には犠牲者の氏名がまつられ、各方面から贈られた数十点の花輪が並んだ。

開会式、犠牲者、殉死者の氏名発表のあと施主の中津榮芳さん(互助会委員長)の追悼の辞、福本水俣、安谷出水の両市長、尾田水俣市議会議長ら後援団代表や来賓の弔辞があった。追悼のことはいわずとも、ノーマア・水俣病、「再びこのような惨事を繰り返すことがないように」と述べられ、遺族からは新たな悲しみを感じ出にすすむ泣きの声ももれていた。

水俣市に奇病といわれる水俣病が発生、最初の死者が出た二十九年八月から十年目、患者数は水俣市の九十九人をはじめ津奈木町五

人、葦北町各一人、磯原の出水市六人、計百十一人のほり、このうち犠牲の水俣病が十七人もいる。死に傷は水俣市千三人、津奈木町二人、出水、葦北、葦北の各市町が各一人ずつの計三十八人。犠牲三十八人が水俣市立病院で入院治療を受けているが、病のは自身被害を避け、悪いものは社会に遺棄してこる。

この間、原因の究明や補償などをめぐって社会問題を起り、新しい憲法は三十四年に衆議院を断りたものの、決定的治療はなかなかむずかしい。だが病の地にも重症患者を治療するリハビリテーションセンター福原病院が建設中であり、県が中心で進める水俣病のしめどしめ問題もようやく解決、近く着工する道ごとにもなると、ようやく明るい希望がもたらされた。市民も奇病の恐怖を忘れようとしてこる。

この慰霊祭は、十年目を機会に過去をいまいましい思い出を一新、ノーマア・水俣病を折ったもので、水俣市にとって記念すべき行事だった。

なおこのあと午後三時から同市天神町の調養場で、県前大、新日興、商議所、市立病院、水俣、出水両市、互助会代表など三十五人が参加して水俣病座談会を開き、当時の苦勞、回顧、リハビリテーション対策、政府への要請事項などについて、約一時間話し合った。